〔枕草子八〕いやしげなる物

いよすのすぢふとき

〔夫木和歌抄三十二簾〕六帖題　いよすだれ　光俊朝臣

年をへてよにすゝけたるいよすだれかけさげられて身をば捨てき

百首歌中　惠慶法師

あふ事のまとをにあめるいよすだれいよ〳〵われをわびさする哉

〔殿暦〕永久三年九月廿日丙戌、今日御幸沙汰營之、廿一日丁亥、寢殿西第一二三四間母屋南面卷之、南西面庇垂之、北庇幷自餘所懸伊豫簾、

〔兵範記〕久壽三年正月廿四日丙寅、院導勝陀羅尼供養也、〇略中北庇御前以白革懸伊豫簾、可被懸黑簾也、伊豫簾頗不審也、

〔明月記〕建暦三年正月廿五日、先是少將諷誦物、布結之如恒相具文奉送、寢殿南面庇三間本自爲公卿座所也懸伊與簾以紙上之、白革懸之、以

〔易林本節用集多器財〕珠簾タマスダレ

〔伊勢物語下〕むかし男、みそかにかたらふわざもせざりければ、いづくなりけんあやしさによめる、

ふくかぜにわが身をなして玉すだれひまもとめつゝいるべきものを

かへし

とりとめぬ風にはありとも玉すだれたがゆるさばかひまもとむべき

〔夫木和歌抄七葵〕寛喜元年女御入内御屏風、人家有樹陰簾懸葵、　西園寺入道太政大臣

もろかづら日かげやをそきたますだれあけてもすゞしならの下風